

視点・論点

グアム・米軍再編計画が着々進行

山口 響

この二、三月の間に起こったグアムの米軍再編をめぐる動きでもっとも重要なものは、日本においては米軍再編特措法の成立、グアムにおいては、沖縄からの海兵隊移転等に関する環境影響評価の方法策定に関する段階がいちおう終了したことである。

これらを受けて大きく進行しているのは、グアムの基地内インフラ整備（電力、上下水道など）や家族住宅建設受注をめぐる動きだ。五月十七日には、グアム公共事業体連合会が日本・韓国の当局と協議を行っている。また、東京でも防衛省が主催した説明会が開かれ、受注を狙う国内企業二七〇社が参加した（八月二日）。他方、グアムのカマチョ知事は、主にインフラ整備の問題に関連して、日本（正確には、日本国際協力銀行）の融資する七億ドル超の使い道に関する協議で日本・沖縄を訪問する意思を明らかにしている（八月十二日）。

この間、グアムの個別の米軍再編も着々と進んでいる。六月十八日には、アランダール空軍基地に二本目の滑走路が完成。七月十九日には同基地に無人偵察機グローバルホークが仮配備となった。また、同日には、グアム三隻目の潜水艦ハツファローが配備された。

グアム・沖縄・日本の連動性がよく見える出来事も多数起こっている。ひとつには枯葉剤問題。沖縄でも、六〇年代に北部訓練場で枯葉剤が撒かれていたことが露見したが、グアムでも同時期に枯葉剤を撒いたと複数の退役軍人が証言を始めている。また、現在起こっていることを簡単に拾ってみると、航空百衛隊の支援戦闘機F-2が北マリアナ諸島で行われた米日共同訓練「コープ・ノース」に参加（六月中旬）、米豪合同演習「タリスマン・セブアー」に参加した空母キティホーク（横須賀基地所属）や強襲揚陸艦「トウガ」、ジュノー（佐世保基地所属）がグアムに寄港（六、七月）、グアム沖で行われた米軍の合同演習「バリアント・シールド」にキティホーク空母打撃団などが参加（八月）

米軍嘉手納基地所属のF-15イーグルが視界不良・燃料不足のため二度にわたってグアム国際空港に緊急着陸（八月十三日）など、枚挙に暇がない。

さて、この間、七月中旬に行われた沖縄中部一〇市町村長によるグアム視察をめぐる、運動側も色々動き回った。この視察が在沖海兵隊グアム移転への露払いになると考えた私が、視察の目的について尋ねる公開質問状を市長らに出したらどうかという提案を五月の反派兵全国合宿（東京）で行って皆さんを困らせてしまったことを一部の方はご存知だと思う。その後、いろいろな方々と相談をする中で、質問状や要請書はお互いカドが立つことになるのでやめようということになり、結局、六月三日のいわゆる「慰霊の日」に行われた「国際反戦沖縄集会」に合わせて、私自身が沖縄に出かけていくことになった。真喜志好一さんや天野恵一さんらにも助けていただいて、（普天間海兵隊のグアム移転を主張している）宜野湾市の伊波洋一市長と短くお話しをし、海兵隊移転に反対するグアムの人々と自身の想いを伝えることができた（このあたりの経緯については、『季刊ヒートプルス・プラン』三九号にも簡単に書いた）。

さて、その七月の沖縄視察団グアム訪問だが、外部に対してガードが固く報道からだけではその内容がつかない。ただひとつ、米軍関係者が市長らに「六五七〇機の海兵隊航空機と一五〇〇人の海兵航空戦闘部隊がグアムに拠点を置く」と話したことだけが伝わっている（『沖縄タイムス』、七月十三日）。このささやきは普天間基地を早くなくしたい伊波市長にとってはうれしいニュースだが、「在沖海兵隊からは司令部だけが移転する」とか「辺野古は普天間の代替施設である」とかいった日本政府の建前を崩してしまうものだ。米軍側がなぜわざわざ「こいつう」手土産を沖縄視察団に渡したのか、その真意を測りかねている。

（やまぐち・ひびきノヒートプルス・プラン研究所）